

5 近 世

西地区円満寺村に、水堀を伴う平城が出来、その西側に城下町が造られました。はじめての平城は、人々に戦争の不安はない社会の訪れを語りかけたでしょう。

ここから、武力による統治から文治へ、法律や制度に合致する暮らしへと大きく転換しはじめました。侍の暮らし、町方の暮らし、村方の暮らし、浦方の暮らしが、それぞれに固定化されました。しかし、その中での人びとの暮らしは、意外に多様な展開がありました。

江戸時代の270年間、人びとは一日も休むことなく、暮らしをゆたかにするために働きつづけ、^{ともしび}くらい灯のもとで寄り合い相談をしてきました。年中行事の楽しさは、祭の太鼓に心おどらせた庶民にしかわからないでしょう。

今、私たちがみつけようとしている舞鶴固有の文化は、幕藩体制下の先人たちによって、ねばりよく、ていねいに積みかさねられてきていることに気づくのです。

民衆文化は、近世の生みだしたものといえましょう。

安土桃山時代

細川藤孝による田辺城築城

天正8年(1580)、信長の命により丹後国は細川藤孝・忠興親子の所領となり、宮津に本城、田辺・峰山などに支城を築いて丹後を治めました。

田辺城は、天守・本丸を囲んで二ノ丸、三ノ丸がある輪郭式の平城で、東に伊佐津川、西に高野川、南は湿地、北は海に接した要害の地に築かれ、敵を防ぎ味方を守りやすい城でありました。

細川藤孝(幽斎)

細川藤孝は、天文3年(1534)に生まれ、慶長15年(1610)に77歳で没した、安土桃山時代の武将であり歌人です。



田辺城石垣



細川幽斎(南禅寺天授庵)

出自は足利一族の三淵氏^{みつぶち}で、後に室町三管領^{かん}のひとり細川氏の養子となり、没落期の室町幕府に仕えました。その後、織田信長に仕え、「本能寺の変」で信長が亡くなると髪をおろして「幽斎玄旨^{ゆうさいげんし}」と号し、豊臣秀吉に仕えました。関ヶ原の戦いでは徳川家康につき、江戸幕府の儀礼制度の成立は故事・政治儀礼に通じた有識者である幽斎の助言によるところが多かったといえます。

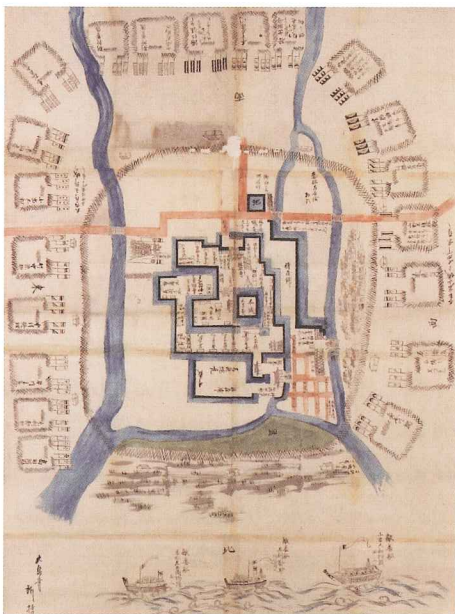
また、和歌を三条西実枝さんじょうにしざねきに学んで古今伝授（『古今和歌集』の解釈の秘説を師が弟子に伝えること）を受け、室町時代の東山文化の教養を江戸時代に伝え「近世歌学の祖」と称されました。

田辺籠城らうじょう

豊臣秀吉の没後、石田三成と徳川家康の対立を中心として諸大名の勢力争いが激しくなっていました。慶長5年（1600）、家康は会津征伐を行いました。この時、細川忠興は家康に助勢し、関東へ向います。ところが三成は、この機会に関西から家康の勢力を除かんとして大坂で挙兵し、同時に家康方についた細川氏成敗せいばいのため関西の諸将に対して、丹後出陣を命じました。

このとき、細川幽齋は宮津城にいましたが、主要な武士はほとんど忠興にしたがって関東に出陣していました。そこで幽齋は、本城の宮津城などを焼き、守りに適した田辺城で留守軍五百余名を指揮し、籠城の態勢をとりました。

慶長5年7月下旬、福知山城主小野木ら石田方軍勢一万五千名は丹後に侵攻、田辺城のまわりを陣取り、遠まきに攻撃を加え、50余



田辺籠城図（大泉寺蔵）

日におよぶ攻防戦がはじまりました。

さて、幽齋はその時代随一の歌人であり古今伝授の継承者であったため、朝廷は籠城戦中に幽齋が討死すれば歌道の秘説が途絶えることを惜しみ、使者を送り幽齋に開城を勧めました。しかし、幽齋は「開城は武人の本意ではない」といって固辞し、古今伝授の秘伝書と「古いにしへも今もかはらぬ世の中に 心のたねを残す言の葉」という和歌一首を託しました。これにちなんで、現在の舞鶴公園に心種園碑が建っています。

9月に入り、なお幽齋が討死することを惜しんだ朝廷は、勅使をつかわせて、両軍に停戦を命じました。

ここに、50余日間にわたる田辺籠城戦は終わりをつけました。それは、関ヶ原の戦いの3日前のことでした。細川家はその軍功により39万石に加封され、豊前国中津へ国替えとなりました。

江戸時代

江戸幕府

徳川家康は、「天下分け目の戦い」とよばれた関ヶ原合戦で、豊臣氏をもりたてようとする石田三成らを破り、全国支配の実権を握り、慶長8年（1603）に江戸幕府をひらきました。

幕府と諸藩が全体として政治権力をつくりあげ、土地・農民・町人を支配するしくみを「幕藩体制」といいます。

身分制度〈士農工商〉

少数の武士（人口の7%）が、多数の農民（80%）や町人を支配するため幕府は、士農工商の身分を定め、その下にえた・ひにんを置き、厳しい身分制度を定着させました。

キリスト教の禁止と鎖国

天文18年（1549）に日本に伝わったキリスト教は、信者の急激な増加を恐れた幕府により禁止されます。また、日本人は海外に行く

ことも、海外から帰国することも禁止されました。外国との貿易は、オランダ人と中国人だけに限られ、長い鎖国の時代が始まったのです。しかし、鎖国はまた日本独特の文化を生み出すことにもなっていました。

京極氏の治政

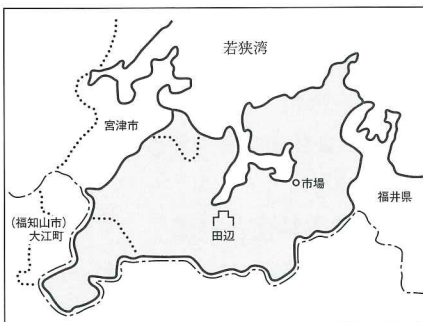
細川氏国替えの後には、慶長5年(1600)、信濃国飯田城主京極高知たかともが丹後国に入国しました。

高知は、たびたび洪水をおこしていた伊佐津川の瀬替えを完成させるとともに、慶長7年に全領の検地を行い米収穫高123,175石の石高を検出して、当国の石高を確立しました。元和8年(1622)高知の遺訓により、丹後国は3人の息子に分与されたので、宮津藩(78,175石)、田辺藩(35,000石)、峰山藩(10,000石)の3藩が成立しました。

牧野氏の田辺藩入国

上方全域を譜代大名領にする幕府の政策により、寛文8年(1668)に京極氏が但馬国豊岡へ国替えした後、京都所司代の要職を退いた牧野親成ちかしげが摂津国から入国しました。

牧野氏は三河以来の徳川家譜代大名で、小藩ながら幕府の重臣でした。2代富成とみしげは奏者番そうじや、3代英成ひでしげは奏者番・寺社奉行・京都所司代、4代明成あきしげは奏者番、5代惟成これしげは奏者番・寺社奉行、9代誠成たかしげは奏者番をそれぞれ勤めました。(奏者番:大名、旗本などの将軍拝謁のとき、その取り次ぎをし、礼式を司り、ときに大名屋敷へ将軍の言葉を伝える上使役。)



田辺藩領域図 (今の福知山市と宮津市を含む)



牧野家伝来の甲冑

田辺藩の農村支配

武士の生活を支えていたのは、農民の年貢でした。そのため藩は、農村を強固に統制して年貢収入の確保を図らねばなりませんでした。

田辺藩では、農民が室町時代から自治的に組織・運営していた惣村そうそんなどをもとに、行政組織に改変していきました。121カ村(後に128カ村)を8組に分け、各組に大庄屋を置き、各村に村方三役(庄屋、組頭、百姓代)を選ばせました。また、藩庁機構としては121カ村を6組に分けて、それぞれ代官を置き、これを郡奉行が統轄し、郡奉行→代官→大庄屋→村方三役という緻密な農村支配を確立しました。

田辺藩の民衆教撫政策

武力による「百姓は生かさぬように殺さぬように」という支配の方法は、やがていきづまってきました。武力のみによる民衆支配が不可能となり、藩主の徳治を農民・町人に顕示する民衆教撫政策みんしゆうきょうぶへと変化していきました。たとえば、町行事への援助、牧野入封200年祝賀行事、また心学の奨励や『田辺孝子伝』の出版もそのような藩の動きのなかでなされています。

参勤交代

幕府は武家諸法度により大名を統制していましたが、そのなかに参勤交代という制度があります。譜代大名である牧野家は1年ごとに江戸と田辺を往復しなければなりません。牧野家はどの道を通して江戸へ行ったのでしょうか。寛政7年(1795)の藩士の記録によると次のとおりです。



道しるべ

田辺城→本町→田辺大橋→寺内→新町→神明下(紺屋)→桂林寺下→朝代神社→引土(京口番所)→京橋→七日市→山崎(京田)→善通寺(真倉)→一ノ瀬→京街道→江戸

なお、田辺から江戸への道には、東海道(約518km、15日かかる)と中山道(約633km、18日かかる)との2コースがありました。

参勤交代制度により、交通網は整備され、商品流通や人の移動もたやすくなりましたが、藩にとっては大変な経費を負担することとなり、やがて財政を圧迫していきました。

農民の生活、町人の生活

田辺藩では、収穫米のうち75%は年貢として納めたといわれます。この年貢は、慶長7年(1602)の検地で決められた公定収穫高に対するものです。その後、農民は収量を増やして実質的な年貢率は下がりますが、藩も小物成や継物ものなり つぐものといった副税をかけてきました。農民にとっては重たい負担でした。しかし、江戸時代には田畑が戦場になることもなく、年貢さえ納めれば土地を取りあげられる心配もなかったため、せいっぱい働いて生産をあげれば、それだけ生活を高めることもできました。

新田開発

新田開発は、年貢をふやすため藩も力をいれ、江戸中・後期にさかんに行われました。東地域では、湾に面した浜・溝尻・市場・泉源寺の各村においては、有力農民を中心に新田開発が行われました。浮島が現在のようになったのは、周りの海を新田開発により干拓したからです。また、西地域では医師であった新宮涼庭しんぐりょうていが順正書院維持のために喜多村の海面を埋め立てた新宮新田が有名です。

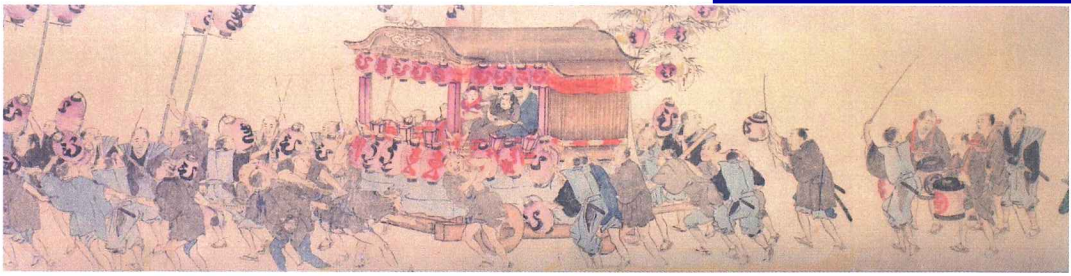
農業技術の進歩

農具も改良され、土を深く耕すための備中ぐわ、脱穀のための千歯こきなどが発明されました。

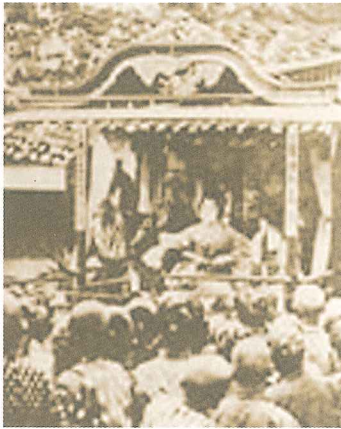
商品作物の栽培

江戸時代前期には、農民は年貢を納めるとあとは食物にもこと欠くありさまでした。しかし、生産をしだいに高め、手もとに生産物を残しておく余裕をもつようになると、これを市場で貨幣にかえるなど、これまでの自給自足的な生活から、貨幣を使う生活に少しずつかわっていきました。そして田辺藩でも農民の工夫により、土地に適したもので、貨幣にかわりやすい商品作物が多くつくられるようになりました。

代表的なものは、桑(養蚕)・桐(桐実油)・榧はぜ(ろうそく)・楮こうぞ(紙)・漆・藍などで、由良川筋では紙の材料としてのコウゾ・ミツマタの他、特に蚕糸業を行い、享保16年(1731)の史料には「蚕おびたかいこだこれしく之を飼い、糸綿を売買する」とあります。この他、大浦ではミカン・ビワ、伊佐津の紙すき、「白糸」という地名をうんだ浜村のそうめんづくりもさかんでした。



朝代神社祭礼絵巻



芸屋台祭礼のこども歌舞伎



瀬崎人形浄瑠璃

民衆の楽しみ～旅・祭～

農業生産力の向上がうみだす生活の余裕の増加により民衆は、生きるための糧となる娯楽や教養を貪欲に求めます。その中心となったのは、旅と祭でした。

近世の旅は、西国巡礼や伊勢参宮などの信仰の旅であるとともに物見遊山ものみゆうざんの旅でもありました。当時の人々にとっては一生分の教養と話の種を仕入れる機会だったのです。他国での見聞は、農業改良の情報を得たり、都市の文化を地方へ伝播する役割をも果しました。

実りの秋に催される祭礼は、田辺の人々にとって大きな楽しみであったようです。市内の各字に伝わる振物・太鼓など、芸能の多さは当時のにぎわいをしのばせてくれます。

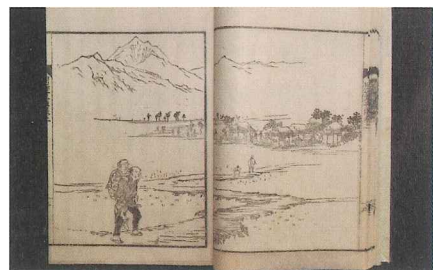
城下町の産土神うぶすながみである朝代神社の祭礼には、ご城下の人々がいっせいにくりだし、芸屋台をひき、太鼓を打ち、祭りを楽しみました。

また、瀬崎には人形浄瑠璃の道具が伝存しており、昭和初期まで神社の舞堂でさかんに人形浄瑠璃を演じていました。

藩校・寺子屋

社会は武力による支配ではなく、新しい秩序を求めていました。また、武士に求められるのも、武力ではなく、官吏としての能力でした。そのための教育機関として、各藩は競うようにして藩校を整備しました。藩校では、幕府が官学とした朱子学を中心に文武両道を教えました。

田辺藩では牧野家3代英成が学事担当を置きました。そして、天明年間(1781～88)には、6代宣成ふさしげによって「明倫斎」が城内三ノ丸にひらかれました。ついで、文久年間(1861～64)9代誠成のときに、学舎を増改



田辺孝子伝



田辺藩藩校の門

築して「明倫館」と称されました。なお、明倫館は、維新後明倫小学校となり、舞鶴の文化の発信地となりました。

このような武士に指導された社会の中で、民間にうまれた教育機関が寺子屋です。寺子屋は、はじめは町方に出現しました。商人・職人にとっては、読み書き計算は不可欠であったためです。やがて、農村でも18世紀後半になると寺子屋が定着しはじめました。農村では村役人の指導力が弱まり、農民自らが訴状を書き、新田開発のため計算を行うようになっていました。

また、田辺には、求心舎と立敬舎という心学修行の道場がありました。

商人・職人〈町屋のくらし〉

田辺藩では、城下町として発達した西地域が、大きく“町屋のくらし”を展開させ、東地域には、小さいながらも郷町として古くから市場がありました。

城下町は、築城と並行して町屋建てが行われました。はじめ城下町を保護育成するために地子（土地にかかる税金）を免除された御免町は9ヶ町でしたが、中期には10町となりました。また、地子を払う地子町は6町で、あわせて16町で城下を形成していました。

村方支配と同じように、町にも町奉行のもとに惣年寄、そのもとに年寄・肝煎・組頭において自治を行いました。

城下町の中心である竹屋町は、天保5年(1834)の『商売書上帳』にみると、422軒のうち、荒物商や魚商など「商い」が42種305

軒、船大工など職人が20種44軒、髪結・按摩などサービス業その他が15種73軒を数えます。

市場は、志楽庄の生産物資の集散地として既に中世に存在していたと伝えられます。江戸時代の道中記、巡礼日記に「いちば」の名が必ず登場することから、西国29番札所「松尾寺」巡礼の宿場町としての性格が強かったことがうかがえます。

海運の発展

江戸時代は年貢を米で取り立てたため、まず、天領と呼ばれた幕府の直轄地から大消費地江戸へ米などを運ぶための海運が利用されました。海難のリスクがあっても一度にたくさん運べる海運が利用されたのです。寛文11年(1671)には東廻り航路が、同12年には西回り航路が開発され海運の大動脈ができました。やがて、中後期になると、産業が発展し、地方都市では特産物が生みだされるようになります。そこで、米だけでなくさまざまな商品を運ぶ廻船網が全国に張り巡らされることとなりました。なかでも日本海航路(北前船)は北海道・東北と大坂を結んで、明治中期まで繁栄しました。

田辺藩では、由良・神崎・田辺・市場などに湊を持ち、日本海海運の一翼を担いました。特に由良川水運により、内陸部の福知山とも



糸井文庫錦絵「安寿と厨子王」



奉納和船

つながる由良・神崎は湊としても、水夫の供給地としてもにぎわいました。

船によって各地の文物がもたらされ、神崎の湊十二社で毎年奉納される「塩汲み踊り」の一節に「能登の輪島で塩汲めば 上り下りの船を見る…」があり、当時の交流をものごとります。

幕藩体制の動揺

飢饉、百姓一揆

18世紀になると、産業の発達にともない、農村へも、貨幣経済が浸透し、それに藩の重税が加わって百姓間に貧富の差を拡大させていきましたが、百姓の生活にいっそう大きな痛手を与えたのは、たびたび押し寄せる凶作と飢饉でした。特に享保18年(1733)、天明4年(1784)、天保8年(1837)には、非常に大規模な飢饉となりました。

こうしたことが、幕藩体制の基礎である農村の構造を変化させ、地主と小作人、村役人と平百姓などの対立が表面化するようになりました。農民が次第に政治的に目覚めるようになってからは、村政の不正を追求した村方騒動や年貢の減免を要求した逃散・一揆が増加します。

田辺藩では、京極時代に、伊佐津周辺の村々が年貢軽減を求め一揆を起しています。また、享保元年(1716)には森・行永両村で百姓36人が逃散しています。さらに、全藩領をまきこんだ百姓一揆が、享保18年(1733)と宝暦6年(1756)に起っており、農民たちは、

享保一揆で5か年間の減免などを勝ち取りましたが、享保一揆で3名、宝暦一揆では8名の刑死者を出しています。この他、飢饉時の局地的な騒擾や村方騒動も再三起って封建社会の基礎は大きく揺らいでいったのです。

外国船の来航

寛永16年(1639)、幕府はポルトガル船の来航を禁止したことで、鎖国を完成させました。しかし、18世紀になるとロシア船が日本近海に現れはじめました。また、19世紀になると、イギリスが通商を要求して来航しました。幕府の対応は二転三転しましたが、嘉永6年(1853)アメリカのペリーが黒船で浦賀に来航し、開国を要求したことから、遂には安政5年(1858)日米修好通商条約を結び、開国のやむなきに至りました。

田辺藩でも、文化5年(1808)以降、藩士だけでなく、猟銃を持つ猟師に御用がいろいろつけられたり、一般の百姓に荷物運搬の軍役に課せられたりしました。ペリーが来航すると、藩は武器の調達など、軍費がかさみ財政を圧迫しました。この時期、藩は軽輩出身の儒学者野田笛浦を江戸から田辺に帰藩させ、海防と藩校の改革にあたらせています。藩内には台場(砲台)が建設され、大砲が据え付けられました。

明治維新へ

このような内憂外患の中で、幕府の統率力は弱まり、開国派と攘夷派、佐幕派と尊王派が入り混じって明治維新に向かいました。

田辺藩は、家康以来の譜代大名であり、二条城や京都御所の警護を命じられています。元治元年(1864)第一次長州征伐では進発の將軍の警護をしていますが、第二次長州征伐では丹後近海警衛のため国元待機となりました。鳥羽伏見の戦いに宮津藩・福知山藩・小浜藩などが参戦する中、田辺藩は動かず、大政奉還も率先して行い、明治元年(1868)山陰鎮撫使によって、無血開城しました。